これからの猪猟〈16回〉

田宮　治

父の後ろ姿を追い続けたわが狩猟人生

正喜氏は「あいつがあんな所まで動いて撃たなければ間違いなく小俣勢のタツマにまともに登って来たものを」と悔しそうである。

確かに熊は半矢だったため、小俣勢のタツマ六〇㍍くらいの所からこの谷底に落ちて来たのであるが、熊が落ちたこの場所は小俣勢のタツマの真下である。そのため、駆け下りて来ているのは、まだ小俣勢四人だけである。

「狙ったとおり登って来て、ドンピシャリだったなあ」と悔しくて仕方ないようである。満兄は「若いオス熊だなあ」と話題を変えて落ち着かせようとするが、「本当に全く許せない」と言い続けるので、満兄は「若者が熊を撃ちたい気持ちが逸り、やってしまったことなので悪気はないのだ。若い時はみんなこんな失敗を繰り返して大きくなるのだから、ここは全員で『おめでとう』と祝ってやろうや」と、まるで教え子にでも説教するように話している。

そこに中継勢と一緒に、あの若者がやって来た。満兄は大声で「よかったね、おめでとう」と祝福した。続いて正喜氏も何事もなかったように「おめでとう」と言っている。私も義信も同様に心から祝福したが、小俣勢の誰もこの若者の名前を知らない。

中継勢が熊を撃ち獲ったことだけが、今日の熊狩り全員に知らされた。これでこの熊は中継村に運ばれ、中継集落の責任者である一男氏の家で今日の宴会が盛大に行われることになった。

この若者を私は知らなかったが、一男氏は私の一つ年上で、中学時代は「中継村に左ピッチャーの一男あり」と話題になった人物で、集落対抗戦で小俣村と戦ったものである。

この若者も既に悪いことをしたと気付いていた。熊を撃ちにマチバを離れたのは、私たち小俣勢の守っている松林のタツマが低い窪地になっており、登って来た熊をまだ見ていないうちから、上の高い所に陣取っていた中継勢のこの若者からは雪中の木の下に逃げて来た熊が丸見えだったらしい。

熊は私たちのタツに出て来る前に、小峰が一本谷に向かって下りているので、その小峰の深い雪中に立ち止まって、まだ離れている勢子の様子をうかがいながら動かなかったらしい。「しばらく待ったが動かないので、これは飛んで行って撃たなければと思い、夢中で撃った」とさして悪びれた様子もない。いずれ本人からそのことを聞けば、責任者の一男氏あたりがきっちりと指導するだろう。

猟人は誰だって、一度や二度の大きな失敗をしなければ一流の熊撃ちになどなれるものではない。しかし、どんな理由があろうと、熊を撃ってよいのは、自分の守る守備範囲だけで、他人様のタツに入り込んで熊を撃つことは絶対にあってはならない。

満兄の気遣いのお陰で、何事もなかったように和気藹々の笑顔で記念写真まで撮ることができた。

さて、心に残る伝統の一戦はいよいよ終わろうとしているが、撃ち獲った熊は深い雪の一番沢奥である。もう三時を回り、快晴で眩しかった空も薄暗くなって雪も降り始めてきた。それでも若者たちの頑張りで熊は雪上をスルスルと

滑り、思ったより簡単に道路まで運び出すことができた。

伝統の熊猟は何もないこの集落特有のものであり、熊は自然の恵みで宝物だから、全村あげて戦うのである。つまり、昔からの年中行事なので、熊は誰が撃ち獲ろうとすべて平等に分かち合うのだ。そして、戦いは何が起ころうと全員が協力して、楽しく安全に実践することが基本である。

そして、後はいつもどおりの大宴会である。伝統熊猟に付きもので欠かすことのできない宴会は、これまた全村あげて行うのが習わしであり、学校長や警察署長まで招待して盛大に行うのである。

この日の宴会は、熊を撃ち獲ったのが中継勢であったことから、責任者の一男氏の家で行われた。その目的は五カ村の勢子たちと猟師たちの融和と親睦を図ることで、何の産業もない山村全体の発展につなげているのである。当然そんな堅苦しい考えとは別に、若者を中心に多いに楽しみ、和やかな歓談の中で熊鍋を味わい、飲めや歌えやの大盛り上がりだった。

私はこの伝統熊猟でわが家の兄弟がいかに頑張って活躍していたかを、ここで言い置きたかったのである。長男の喜久一は隣り村（旧八幡村）の猟友会長として招待され、宴会の一番上座に座っていたし、この時の学校長が満兄であり、栄作兄は小俣の猟友会長で、今日の勢子の立て役者であり、その疲れた身体で熊の解体を一手に引き受けていた。

長男の喜久一は毎年一人で熊を七、八頭も獲り、新潟日報にたびたび掲載されていた。また、満兄は山熊田の学校長の時にNHKが「熊の生態」という特別企画をした折に、一年間、その収録のために山熊田集落の熊猟場の案内役を務めた。教え子を何十人も猟師にしていた。

この兄たちはぞっくり揃って宴会の上座に座っていられるところまで狩猟を極めていたのである。これは何も自慢しているわけではなく、ただひたすら父を信じて一生懸命その後ろ姿を追い続けて、立派に成長した四人もの兄弟猟師が堂々とこの伝統熊猟の現場に並び立っていたという事実である。

私はこの勇姿をもって、父菊之亟、母ミツの教えがいかに正しいものであったかを説明したかったのである。

当時、私は五十歳になっていて某会社を経営し四人家族だったが、どんなに忙しくてもお盆と正月は家族を連れて里帰りしていた。また、十一月十五日の初猟は生国小俣で兄たちと懐しい山々を見歩きたいとの思いで帰省し続けている。

狩猟の形がどんなに変ろうと何か起ころうと、私の狩猟に対する思いは不動である。父の師匠がいて兄たちがぞっくり揃っていたからこそ、今の自分があるのだと感謝している。

折しも五月二日のテレビ報道では、村上市で熊に襲われて小池さんという主婦が亡くなられたようである。その熊を猟友会が追っているとのことだったので、すぐに横山二男氏（猟友会長）に電話すると、やっぱり横山氏の猟友会が熊を追っていて、やっと一頭（九〇キロ）は撃ち獲ったとのことだった。

私は生国の小俣地区や山熊田地区かと思ったが、村上市でも反対方面の荒川流域のキャンプ場に、冬眠から目覚めた熊が腹を空かして焼き肉の残飯あさりに出たとのことだった。また、テレビでは報道されていないが、あと一人の方が顔を切られる大ケガをしているとのことで、仕事を休み毎日手弁当で熊狩りをしているそうだ。

ちょうど私が横山氏の猟友会の納会に、ここ数年猪肉を送っているが、そのお礼に笹団子とチマキが送られてきた時だった。そんな横山氏も満兄の教え子の一人で、兄が猟友会長や指導員をやっていたお陰で、素晴らしい猟師たちと仲間になれてとても幸せである。

この年になって、狩猟がなかったらただのくそ老人になっていただろう。狩猟のお陰で素晴らしい猟人の輪がどんどん広がり、また猟は身を助けるのである。そんな思いで毎日毎日仔犬たちとたわむれ、元気のもとにしているが、なかなか年に勝つのは難しいようである。

（つづく）